気前の良い神様への信仰

マタイ20章1～16節
2022年3月06日
松田 基子 師

キリスト信仰、それは生ける神様、生けるイエス・キリストとの、生ける交わりです。 本来自己中心で、神様に叛き(そむき)自分勝手に生きて、罪を犯してきた全人類に、その様な関係は、与えられ得ないものでありました。 そこには人間の創造主であられる、神様の深い愛がありました。 人間に、命と、使命を与えて、世に送り出された神様は、人間がご自身に叛き、罪を犯し、滅びに向かって行く事を、見過ごしにされる事はできませんでした。

滅びに向かっている人類を救う為には、人類の罪が償われ、贖われなければなりませんでした。 しかし、罪に染まった人間に、その資格は全くありませんでした。 神様はそのために、同じ心で人類を愛しておられる、神の御子を、人の子として、この世に誕生させられました。
それが、イエス様です。 **イエス様の使命**は、神様の**愛を表し**、どんな人も、全ての人が、神様に**愛されている**ことを悟って、神様に立ち帰り、全ての人が、イエス様の**贖いを信じ**て、天の御国に**帰って来る**ことでした。

しかし、当の人間はどうだったでしょうか。
イエス様時代のイスラエルの人々は、
『良い行いをすれば、つまり、神様が命じられた律法を守れば、天国に入れる』
と思い込んでいました。 人間はここに、大きな思い違いをしていました。 人間は、自分が考える良い行いと言うものが、如何に不完全であり、聖く、正しい神様の前には、何の役にも立たないと言うことに、気付いていませんでした。 彼らはそのために、当時の生活環境において、律法を守る事の出来ない徴税人や、遊女、日雇い労働者、病気の人、身体の不自由な人達に対して、罪人というレッテルを貼って、非難し、排除していました。 それが如何に高慢で罪深いことなのか、そのことに気付いていませんでした。

イエス様は、彼らが罪人と呼ぶ人達に近づき
『神様は、全ての人を、分け隔てなく、その存在そのものを愛して、等しく招いて』
おられる事を、教えられ、彼らとの交わりを持たれました。 その人達は、自分達が、神様に愛されて居る事に驚き、心から喜び、イエス様を信じる喜びに溢れました。 イエス様はこの様な姿を現して、マタイ19章30節で、
「**先にいる多くの者が後になり、後にいる多くのものが先になる**」
と言われ、一つの喩え話をなさいました。
それがマタイ20章1節からの喩え話です。
1節に、
「**天の国は次のようにたとえられる**」
とあります。
『誰もが天国へ入りたい』
と願っています。 人間はその条件として、良い行いをしなければならないと思い込んでいます。しかし、罪ある人間の考える、良い行いが、如何に神様の御心を阻んでいるか、神様の御心を汲み取っていないかということを、イエス様は教えて下さっています。

喩え話はこうです。
「**ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った**」
とあります。 ある家の主人とは、神様です。
ぶどう園は、神様を信じる人々が集められる所です。 神様は、神の国を整えるために、どの様に働いて下さっているかが、示されています。
主人は夜が明けるや、その日を生きるために、雇い主を求めてやって来る労働者達が集まる広場に急ぎました。 神様は常に、
『ご自身の許に、立ち帰って来るように』
と呼び掛け続け、立ち帰る人々を探し続けておられます。 主人が広場に行くと、そこに、今日一日の糧を得るために、
『私は力の限り働きます。 どうぞ雇って下さいと必至の思いで、主人を求める人々に出会いました。 主人はその人達に、1日1デナリオンの相場の日当を約束しました。』
彼らは家族に、この日の糧を与えられることに、喜びと安心が湧き上がってきました。 足取りも軽く勇んで主人と共にぶどう園に行き、早速、喜んで働き始めました。 ぶどう園は喜びに満ちていました。

一方、ぶどう園の主人は、9時頃再び、日雇いの職を求めて集まる人々の居る広場にやって来ました。 そこに、何もしないで立って居る人々を見つけると、4節で、
主人は彼らに、
「**あなたたちもぶどう園に行きなさい。**
ふさわしい賃金(詳訳聖書では、正当と思われるもの)**を払ってやろう**」
と言いました。 彼らは広場にやって来るのが少し遅れたのかも知れません。
『でも、まだ雇ってくれる主人はいるに違いない』
と待っていたのでしょう。 主人に声を掛けられて、喜んで付いて行きました。

彼らは、ぶどう園に着くと、前に働いている人達に従って、一生懸命に働き始めました。
あっと言う間に12時になりました。 ぶどう園に昼の休憩時間がくると、主人はまた、広場に出かけて行きました。 もう太陽も上り、広場に労働者を求めに来る主人は殆どいません。 農園で働いている人が倒れたとか、何かのトラブルが無い限り、ぶどう園は、人が足りている筈です。
そんな時間に、この主人は、広場に行って、職を求めている人はいないかと、探しました。

居たのです。 雇ってくれる主人に出会えず、家に帰るには帰れず、
『もしや、人手不足で、求人に来る主人がいるかも知れない』
そんな希望を抱いて待っていました。 彼は希望を捨てずに、待っていた甲斐がありました。
主人は、
「**あなたがたもぶどう園に行きなさい。**
相応しい賃金を払ってやろう」
と、9時に雇った人達と同じ様にして、雇ってくれました。 彼らは喜び勇んで、主人について行って働きました。

午後3時になりました。 暑い日差しの中、労働者達が一息入れている時、主人はまた、広場に出かけて行きました。 主人はそこに、仕事にありつけず、帰るに帰れず、思案して居る人達を見つけると、
「あなた達もぶどう園に行きなさい。
働かせてあげよう」
と言って連れて帰りました。 労働者達は、
「ああ・・・これで家族に、パンの一切れでも、食べさせられる」
との喜びに、一生懸命に働きました。

陽も傾き、午後5時頃になりました。 主人は何の用があると言うのでしょう。 またまた、広場に出かけて行きました。 主人は、
『だれか、困っている人はいないか』
と、日雇い労働者達が集まる所までやって来ました。 すると、そこに、数人の労働者が立っていました。 彼らは、見るからに弱々しそうで、仕事がこなせる様な体格ではありません。賃金を払うからには、
『それだけの働きが出来る人間しか雇わない』
と言う主人からは、振り向きもされなかった人達です。 しかし、彼らは、そこに居る以外に居場所が無かったのです。 ぶどう園の主人は彼らに近づき、優しく尋ねました。
「**なぜ、何もしないで1日中ここに立っているのかね。**」
すると、彼らは、
「**だれも雇ってくれないのです**」と、
力なく答えました。 彼らはもう、諦めていました。
もうすぐ夕暮れです。 一文のお金も持たず、家族の許に帰ることほど、辛い事はありません。
『誰も雇ってくれない。 雇い主は誰も、自分に関心を示そうとはしません。 自分を唯の労働力としか評価せず、これじゃあ仕事は出来ないだろう。こんな人間を雇ったら大変だ』
と、相手にしてくれなかったのです。 彼らは自分が、認められない辛さ、家族に今日の糧を与えられない辛さ、肉体的にも精神的にも辛い思いで、立っていました。

ぶどう園の主人は、彼らに深い同情を寄せ、
「**あなたたちもぶどう園に行きなさい**」と、
仕事を与えました。 彼らの暗い、悲痛な顔が、一変に喜びに変わりました。 何と言う親切、何と言う憐れみでしょう。 彼らは小踊りして、ぶどう園に出かけていって、力の限り働きました。
でも、仕事が終わる時間はすぐに来てしまいました。 ぶどう園の主人は、監督に、
「**労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を**

払ってやりなさい」
と命じました。

ぶどう園の主人は、一般社会の常識とは、全く違っていました。 お昼までは兎も角として、大して仕事の成果が上がらない、午後3時や5時に、慈善事業でもしているかのように、労働者を探しに行ったかと思えば、その、最も働きの少ない夕方の5時に雇われた人達から、
「**賃金を払ってやりなさい**」
と、命じたのです。 監督は、主人に命じられるまま、労働者を集めると、先ず、夕方5時頃に雇われた人達を呼び、彼らに1日中働いた相当の賃金、1デナリオンを渡しました。

彼らの驚きと、喜びは、周りに隠せませんでした。 彼らは、驚くべき恵を受けて、主人にどれ程感謝したことでしょう。 次に、午後3時、12時、午前9時に雇われた人達も順番に、同じ様に1デナリオンの賃金を貰いました。 皆、主人に感謝しました。 愈々、最初に雇われた人達の番になりました。 彼らにいくら払われたのでしょうか。 10節を見ますと、
「**最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。 しかし、彼らも1デナリオンずつであった。 それで、受け取ると、主人に不平を言った。**
『最後に来たこの連中は、1時間しか働きませんでした。 まる1日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは』」
と不平を訴えました。

今日の、労使交渉なら、尤もな要求です。
しかし、これは、喩え話であって、労働条件の問題ではありません。 イエス様は、
「**先にいる多くの者は後になり、**
後にいる多くのものは先になる」
と言う、信仰の現実を現されたのです。
信仰は生ける神様、イエス様との生ける交わりです。 それは本来、罪ある人間がどんなに良い行いをし、たとえ命を献げたとしても、得る事の出来ない、交わりです。 即ち、信仰です。 その神様との生ける交わりである信仰、それはこれから、
『イエス・キリストが、**全人類の罪**を一身に**負って**、全人類の価値に優る、神の子の値を差し出して、**十字架に架かり**、人類の**罪を贖われる**』
事によって**与えられるもの**なのです。

ぶどう園の主人である神様は、
『この神の御子イエス・キリストによる、
全き**救い**を、**全ての人**に、**与えたい**と、
人々を**招かれる**』
のです。 **それが1デナリオン**です。

実際には、お金に表せないものですが、解り易く1デナリオンの日当に喩えられています。
本来、その1デナリオンは、**人間誰も貰う資格は無**いものです。 みな、自分が神様の前に、罪人であることが分かる時、自分は天の国に招かれる資格など、全く無い者である事が分かります。
そんな自分のために、**イエス様が**、わたしの**罪を負って**、十字架に**架かって**下さり、復活されると、神様は、**イエス様を信じる者を**、天の御国に招かれる、つまり、**御救いを与え**て下さるのです。

キリスト者は誰も、この御救いを受けた時は、
『何ものにも代え難い宝を得た』
その喜びで、全身全霊で神様に感謝し、信仰は喜びに満ちています。 しかし、そんなキリスト者も、神様だけを見つめて、生ける交わりが保たれている間は、ただ唯、感謝なのですが、人間の弱さは、神様から目を離し、隣を見るのです。
隣を見ると比べてしまいます。 自分はひたすら神様に、教会に献げて来た人生なのに、後から入信した、あの人は、この世的にも恵まれるばかりで、それに比べて、私は苦労ばかりの人生を送らされて、
『神様、不公平ではないのですか』
と、呟きが起こって来るのです。

その彼らに、ぶどう園の主人である神様は、13節で、言われます。
「**友よ、あなたに不当なことはしていない。**
あなたはわたしと、1デナリオンの約束をしたではないか」
と言われます。 神様は何ものをもっても、人間自身では、決して得ることの出来ない、御子イエス・キリストによる御救いを、それぞれに1デナリオンとして、お与えになったのです。

それは人間の**功績に全く関係無く**、神様からの**一方的な憐れみと恵**によるものです。 それなのに、キリスト者も永い信仰生活に、苦労や試練ばかりが続きますと、主イエス・キリストの御救いという、驚くべき恵の中に、入れられていることを忘れて、この世の様々な、お金や地位や名誉といった物を求めてしまうのです。

イエス・キリストの御救いだけでは満足出来ないのです。 もっと、あれも欲しい、これも欲しいと神様に文句を言い始めるばかりでなく、いま、御救いに与って、喜んでいる人と一緒に、御救いを喜べなく成ってしまうのです。 そんな信仰が冷めた人達に、主人である神様は、決して叱り飛ばして追い出されることはありません。
14節に、

「**自分の分を受け取って帰りなさい**」

つまり、イエス・キリストの御救い、信仰を大事にしなさい。

「**わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ**」

『**イエス・キリストの救**いを**与えたい**のだ』

と諭(さと)されます。

最後の者とは、永い人生の旅路を、**自分流に生きて**来て、イエス・キリストの**御救いに出会わなかった**、或いは受け入れる事をしなかった人が、人生の**夕暮れ**に、イエス・キリストの**御救いを受け入れ、信じた**のです。 この人は、人生を神様のため、教会のために、労してきませんでしたが、神様は**信仰に**より、イエス・キリストによる全き救い、**天国の国籍**を**お与えになった**のです。

神様は人間の行いによらず、ただ、イエス・キリストを**信じる信仰**によって、法外な恵である天の国の**国籍を与えられるのです。** ぶどう園の主人である神様は、何と気前の良いお方でしょうか。 その神様が、15節に、

「**自分のものを自分のしたいように**しては、いけないのか。 それとも、わたしの気前よさをねたむのか」

と言っておられます。

神様は本当に気前の良いお方です。 御子をさえ、罪深い私達人類の為に、お与えになったのです。 その神様に対して、信仰は何時も今が問われます。 昨日の信仰では、神様に通用しません。 イエス様はマタイ7章22節で、

「**かの日には、大勢のものがわたしに、**

『主よ、主よ、わたしたちは御名によって預言し、御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇跡を、いろいろ行ったではありませんか』

と言うであろう。 そのとき、わたしはきっぱりとこう言おう、

『あなたたちのことは全然知らない。不法を働く者ども、わたしから離れ去れ』」

と言っておられます。 こういうことに、ならないとも限らないのです。 主イエス・キリストの**御救いに与ったその価値**は、私達の生命以上の、**死を超え**て、全**存在を保証**する**高価なもの**です。
これ**だけを握り**、この喜びに**日々生かされる**。
それが生ける**信仰の秘訣**です。

信仰の世界は、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる世界です。 日々法外な恵である、イエス・キリストの御救いに、驚き、感謝を抱き、生けるイエス・キリストとの交わりに生きる信仰、この信仰に生かされて行こうではありませんか。

お祈りを致します。
憐れみ深い天の父なる神様

私達が命を差し出しても、得る事のできなかった永遠の命を、イエス・キリストの十字架による贖いにより、**唯イエス・キリストを信じる信仰**によって、お与え下さる神様の気前よさに、驚くばかりです。

人生に無くてならないものは、
唯それだけです。 この宝を失う事が無いように、日々神様との生ける交わりに生きさせて下さい。

尊い救い主イエス・キリスト
のお名前によってお祈りを致します。

アーメン。